2020.2.22
第3回　応用心理測定研究会

学生支援尺度作成に向けた仮データの収集

京都先端科学大学（非常勤講師）
山本理恵

1

問題（前年度の報告）

・大学生活への不適応に伴う休学や中途退学の増加（文部科学省，2014）

・基礎学力不足，学習態度・学習習慣が身についておらず，授業についていけないなどの学力面での適応の困難，大学での人間関係や社会生活における適応の困難（谷島，2005）。

・大学生の生活習慣を意識する機会の少なさ。生活習慣の悪化により精神的健康が低下→大学生活への不適応を助長（佐々木，2009）。

・大学生活への不適応につながる問題は学力面だけではなく，人間関係や日常生活の問題まで幅広く存在している（野口・園田，2018）。

2

問題（前年度の報告）

・青年期は人格形成の途上にあり，学業や進路に関する課題に主体的に取り組み，課外活動や対人関係でも社会的な責任をより求められる状況に直面するなかで，強いストレスを抱える学生は現れても不思議ではない。不適応に陥った際には，早期の発見や対応が必要であることから，大学においても教員による学生の支援が果たす意義は大きい（石田ほか，2009）。

・大学生の不適応状態の背景に必ず「不安」がある。学生の日常における不安水準を詳細に分析できれば不適応の早期発見・予防可能（藤井，1998）。

・大学生のストレス，不安感，抑うつには，適切な「ソーシャルサポート」が有効（片受・大貫，2014；片受，2016）。

⇒学生への支援・援助をしていく必要
⇒学生への支援には，学生の適応状態を把握が必要
⇒適応状態を測定できる尺度を作成（本研究の目的）

3

方法

前年度の報告

1. 尺度項目収集（“適応”に関するもの　39尺度1017項目）
2. 尺度項目分類
   ①適応要因・適応状態・適応結果
   ②（適応状態を）
      学習・対人関係・生活／適応・適応感
3. 尺度項目から，学習・対人関係・生活それぞれの領域において，大学生活への適応に必要な要素を探る

今回の報告

4. 仮尺度の構成
5. 予備調査実施
6. 分析
7. 尺度の再構成

4

尺度項目の分類（前年度の報告）

1. 適応要因・適応状態・適応結果

☑学校生活への適応の要因になりうるもの

例．個人の特性，傾向，価値観，環境・・・など

☑学校生活への適応状態を測定しうるもの

学習，対人関係，大学生活←学生支援ができる部分

☑学校生活への適応（不適応）の結果として起こりうるもの

例．ストレス反応，生きがい感，アイデンティティ形成・・・など

2.「適応」と「適応感」

大隅ほか（2013）

学生本人が「うまく適応している」と感じることは，大学生活の多くの領域において肯定的な結果をもたらすと予想される。大学生活全般において満足し，適応していると感じる程度である「適応感」に注目。

適応（行動的なもの，できる・できない）

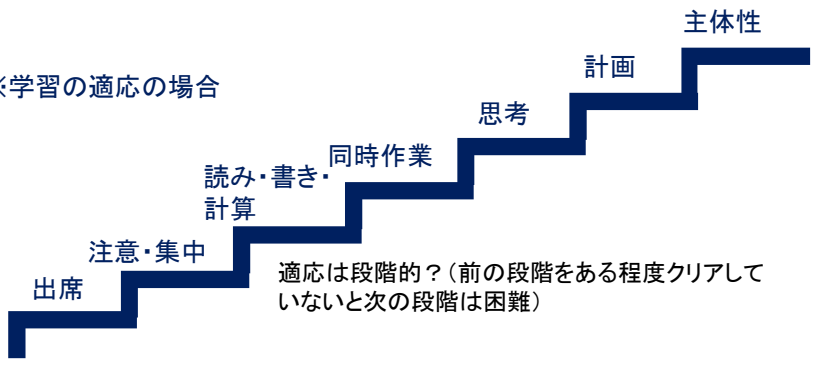
適応感（感情的なもの，自信・不安）

5

尺度項目の分類（前年度の報告）

適応の領域	要素（分類①）	要素（分類②）
学習	出席，注意・集中，読み・書き・計算，同時作業，思考，計画，主体性	適応，適応感
対人関係	自律，関心，想像，コミュニケーション，協力，関係構築	適応，適応感
大学生活	自律，注意，自己管理，自己判断，柔軟性，意欲	適応，適応感

※学習の適応の場合



適応は段階的？（前の段階をある程度クリアしていないと次の段階は困難）

6

仮尺度の構成～調査実施

仮尺度の構成

※【資料1】参照

収集・分類した適応状態に関する項目446項目

→重複するもの・現在の大学生活とは直接関わらないものを削除

→**263項目**

調査の実施

実施日：2020年1月

対象：大学1年生　5名（共通（必修）=Cクラス3名　再履修=Rクラス2名）

Q1：年齢

Q2：性別

Q3：適応状態に関する263項目

4件法（1：あてはまらない　2：どちらかといえばあてはまらない

3：どちらかといえばあてはまる　4：あてはまる）

7

結果（概観）※【資料2】【資料3】参照

※得点が高いほうが不適応度高い（*は逆転後の得点）

※「適応」と「適応感」の項目は表現や項目数などが完全には対応していない

★再履修クラスのほうが全体的に得点（不適応度）は高い傾向

★（再履修生の中でも）適応が上手くいかない部分がどの領域に強く出るかは個人により異なる。

No4：対人関係，コミュニケーションなどの不適応度は低い。

学習領域の初期のステップ（出席，注意・集中）や

生活領域の自己管理などの不適応度が高い。

No5：学習領域と対人関係領域で，「適応」よりも「適応感」で

より得点（不適応度）が高い傾向。

★学習領域で問題が見られなくても，対人関係，大学生活で困難を感じている場合もある（No2）。

8

結果（概観）※【資料4】参照

再履修クラスで得点の高い項目（学生支援のヒント）

＜学習＞

★授業に対する意欲の低さ（実際の出席状況），注意集中の困難（←「学習」のごく初期のステップ）

★学習に対する意欲の低さ，先延ばし傾向，主体性の低さ

＜対人関係＞

★他者への興味・関心の低さ，（その一方で）対人関係における不安・苦手意識

＜大学生活＞

★生活習慣，選択判断の困難さ，サポートの求め方，大学生活の負担感（その一方で）退屈さ　　・・・などなど

9

今後の課題

★項目・尺度構成の見直し

・個別の回答の詳細検討

・多様な学生での調査（共通クラス，再履修クラス）

・適応と適応感

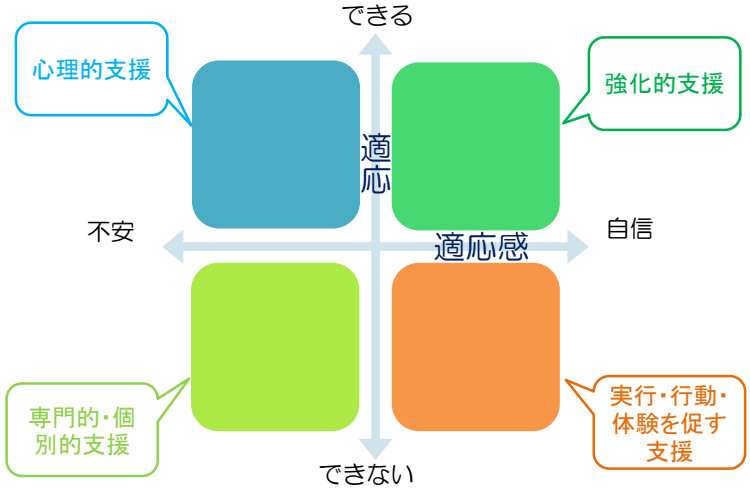
・支援的視点

・・・などなど

10

支援の可能性

・その学生がどの領域のどの段階で困っているか，適応によって支援の方法が異なる



11

引用文献

藤井義久 1998. 大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討　心理学研究, *68*, 441-448.

石田弓・堀匡・品川由佳・兒玉憲一・岡本祐子・松下姫歌・大塚泰正 2009.　ストレス脆弱性克服に挑む教育科学－ストレス状況において大学生が求める大学教員からの支援－　広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, *8*, 170-187.

片受靖 2016. 新大学生用ソーシャルサポート尺度と精神的健康，援助要請スキルの関連についての研究　立正大学心理学研究所紀要, *14*, 65-70.

片受靖・大貫尚子 2014. 大学生用ソーシャルサポート尺度の作成と信頼性・妥当性の検討－評価的サポートを含む多因子構造の観点から－　立正大学心理学年報, *5*, 37-46.

野口大貴・園田直子 2018. セルフコントロールの水準と変動の大きさが大学生活への適応感に及ぼす影響　久留米大学心理学研究, *17*,25-37.

大隅香苗・小塩真司・小倉正義・渡邉賢二・大崎園生・平石賢二　2013. 大学新入生の大学適応に及ぼす影響要因の検討－第1志望か否か，合格可能性，仲間志向に注目して－　青年心理学研究, 24, 125-136.

佐々木浩子 2009. 大学新入生の生活習慣と精神的健康の変化 人間福祉研究, *12*, 75-86.

谷島弘仁 2005. 大学生における大学への適応に関する研究　文教大学人間科学部『人間科学研究』, *27*, 19-27.　・・・ほか

12